

所属・資格 英文学科・教授

申請者氏名 関田 朋子

研究課題		英国 19 世紀小説とジャーナリズムに関する研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	英国 19 世紀の小説家の著作（フィクションに限らずジャーナルに寄稿した記事を含む）や、同時代の定期刊行物のあり方を、当時の社会的コンテクストおよびその他の社会的コンテクストのなかで、読み解くことを目的とする。その際に、発表媒体の違い（紙面で発表されたものを原作として後の時代に原作として別媒体で発表した場合等を含む）や、刊行物と読者層との関係性に注目して、個々の作品に当たりたい。
	研究の結果	英国 19 世紀の人気作家 Wilkie Collins が発表したセンセーション・フィクション <i>The New Magadalen</i> と、それを元ネタにした初代三遊亭円朝の翻案落語『蝦夷錦古郷の家土産』を比較し、それぞれの社会的コンテクストのなかで読み解いた結果、両者ともに文化的タブーを犯した者に対する社会の不寛容をテーマとしてはいるが、そもそもタブーが前者においては売春であり、後者においては身分制度の穢多・非人であったことが分かった。 ナントの勅令の廃止から 19 世紀までの著作物に描かれたユグノー信者の表象についての概観的研究においては、小説や定期刊行物に描かれたユグノー像、とくにロンドンのイースト・エンドに位置する Spitalfields のユグノー像に焦点を絞って調査を行い、時代の変遷によって読者の移民への警戒心が薄れるにつれて、典型的なユグノー像が変化し、史的悲劇の犠牲者というより好意的な像になっていくことが分かった。
	研究の考察・反省	英語を読むことができなかった初代三遊亭円朝に、詳しく原作の内容を話して伝えたのは関直彦であり、いわゆる「三大臣（山県有朋・井上馨・榎本武揚）蝦夷御巡回」（1886 年）に二人が同行した間ではなかったかと推測されるが、それを裏付ける決定的な証拠を見出すことができなかったことが残念である。 Spitalfields におけるユグノー像の変遷は、当時としては最先端の絹織物の技術をフランスから持ち込んだ職工が集中的にこの土地に移り住んだという特色はあるものの、他の地域のユグノー像の変遷と重なることが予想されるが、その相違については今後の研究課題としたい。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	研究発表 1) 「円朝の翻案落語『蝦夷錦古郷の家土産』と Wilkie Collins のセンセーション・フィクション —原作の同定及び翻案との比較—」英米文化学会第 36 回大会 2018 年 9 月 8 日 於 京都学園大学太秦キャンパス 2) 「ユグノーと英国織物産業—デザインにおけるイングリッシュネスの模索—」日本ヴィクトリア朝文化研究学会第 18 回全国大会 シンポジウム「移民への錯綜する眼差し—排除と寛容のはざままで」2018 年 11 月 17 日 於 日本女子大学目白キャンパス 3) 「文学という名の社会装置—大学教育において文学の授業は必要か—」高麗大学校文科大学—日本大学文理学部 学術発表会「大学における人文学と人文教育、その現実と方案」2018 年 12 月 21 日 於 高麗大学校国際館 研究成果物 「三遊亭円朝による翻案落語『蝦夷錦古郷の家土産』種本の同定—Wilkie Collins 作 <i>The New Magdalen</i> —」日本大学文理学部人文科学研究『研究紀要』第 96 号(2018 年 9 月): 125-139 頁	